はん、次に入道も都へ歸候はんずるにやと思ひて候つるなり、

〔太平記二十三〕大森彦七事

上下百餘人有ケル警固ノ者ドモ、同時ニアツト云ケルガ、皆酒ニ醉ル者ノ如ク成テ、頭ヲ低テ睡リ居タリ、其座中ニ禪僧一人眠ラデ有ケルガ、燈ノ影ヨリ見レバ、大ナル寺蜘蛛一ツ天上ヨリ下リテ寢入タル人ノ上ヲ匍廻テ、又天井ヘゾ騰リケル、其後盛長○大森彦七俄ニ驚テ、心得タリト云儘ニ、人ト引組タル體ニ見ヘテ、上ガ下ニゾ返シケル、叶ハヌ詮ニヤ成ケン、ヨレヤ者ドモト呼リケレバ、傍ニ臥タル者ドモ、起擧ラントスルニ、或ハ柱ニ髻ヲ結著ラレ、或ハ人ノ手ヲ我足ニ結合セラレテ、只網ニ懸レル魚ノ如ク也、此禪僧餘リノ不思議サニ、走立テ見レバ、サシモ强力ノ者ドモ、僅ナル蜘蛛ノ井ニ、手足ヲ繫ラレテ、更ニハタラキ得ザリケリ、○略下

〔基量卿記〕元祿十一年七月三日丙申、傳聞、本國寺山門有大蜘蛛、大サ一間餘、此間有修理之間、人步等令掃除之處、人步一人爲蜘蛛取、其後數人寄合以斧殺之云々、件人步遂死云々、又此間知恩院三門有蜘二疋、大サ六尺計云々、門上之鳩毎日數疋食之、食首吸血自上落、毎日五六羽宛云々、不知實說、

蜘蛛雜載

〔枕草子七〕はしたなきもの

九月ばかり、夜一よふりあかしたる雨のけさはやみて、あさ日の花やかにさしたるに、○略中すいがいらもんすゝきなどのうへに、かひたるくものすの、こぼれのこりて、所々に糸もたえざまに、雨のかゝりたるが、しろき玉をつらぬきたるやうなるこそいみじうあはれに、おかしけれ、

〔榮花物語三十五蛛のふるまひ〕その○源憲定おはしましける御帳のうちに、くものすをかきたりければ、

わかれにし人はくべくもあらなくにいかにふるまふさゝがにぞこは、御返し宰相のきみ、

きみくべきふるまひならねさゝがにはかきのみたゆるこゝちこそすれ